

<学会記事>7. 最近7年間に第一口腔外科へ紹介された歯科治療時の偶発症について(第2回東北大学歯学会大会講演抄録)(一般講演)

著者	山田 和祐, 作田 嘉那子, 角田 哲, 梅津 康生, 遠藤 義隆, 阿部 洋子, 守谷 友一, 沼田 政志, 川村 仁, 丸茂 一郎, 藤田 靖, 林 進武, 猪狩 俊郎, 飯塚 芳夫, 斉藤 利夫, 越後 成志
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	1
号	2
ページ	133-133
発行年	1982-12-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/31089

mental angle が小さく、下顎前歯の舌側傾斜が大きく、骨格性反対咬合の特徴的形態が強調されていた。

3. 変位群では、下顎結合部の厚径の減少と mental angle の減少が生じていた。

4. チンキャップ治療を行なわなかった Angle I 級および II 級の症例では、金属ピンの変位はみられなかった。

以上の結果から、つぎの結論を得た。

steep mandible で mental angle が小さな骨格性反対咬合の症例においては、チンキャップ治療によって、下顎結合部の唇側骨表面に骨吸収が生じる可能性が高い。

6. 顎関節機能障害に関する診断学的研究(第1報) 高橋和裕、三条大助(口腔診断・放射線)

顎口腔系の病変には炎症・腫瘍・感染症など多種多様なものがあり、その病態も様々であるが、一般にみられる顎機能障害患者では、臨床的に炎症症状がなく、顎関節部や顔面、頭部などの疼痛、顎関節部の雑音、開口障害のような顎関節の機能失調を主要な症状としているものが多い。そこで顎機能障害患者の診断基準になるデータを得るために、我々は昭和54年から昭和57年まで、東北大学歯学部附属病院口腔診断科外来を受診した患者で、問診及び各種の診査により、顎関節症と診断された100例について、種々の検討を行なった。

顎関節機能障害患者は、10~20才代が53%、30才以上が47%で、左右差はみられなかった。初発症状としては、疼痛が52%、雑音33%、こわばり、その他が15%であった。誘因が顎の開閉に関係していると思われるものは85%で、顎関節機能障害の初発した症例は73%、再発した症例は27%であった。運動痛は、91%で患側に80%認められ、雑音群では開口など、1種類の運動で運動痛がみられたものが60%であった。筋の圧痛は84%で、29%は両側に、外側翼突筋など1種類の筋の圧痛は56%にみられた。また、偏咀嚼は76%、顎の偏位は64%で、雑音は69%に認められ、雑音を主訴とした症例は初発より1カ月以上経過して来院する傾向がみられ、偏咀嚼との関係は少なく、過度の開口が雑音発生に起因しているものと思われた。

7. 最近7年間に第一口腔外科へ紹介された歯科治療時の偶発症について

山田和祐、作田嘉那子、角田 哲、梅津康生
遠藤義隆、阿部洋子、守谷友一、沼田政志
川村 仁、丸茂一郎、藤田 靖、林 進武

(口腔外科1)

猪狩俊郎、飯塚芳夫、斉藤利夫、越後成志

(口腔外科2)

このたび私達は、昭和50年11月1日から昭和57年10月31日までの最近7年間に、本学第一口腔外科に紹介され来院した、歯科治療時の偶発症患者について、臨床的検討を行った。なお、今回は抜歯後出血については検討しなかった。この7年間に第一口腔外科外来を受診した新患者数は14,729名で、このうち歯科治療時の偶発症で当科を紹介され来院した患者は35名で、全体の約0.24%を占めていた。これを年齢別にわけると、10歳代、20歳代が多く21例であり、全体の約6割を占め、ついで、30歳代5例、50歳代4例、40歳代3例、60歳以上と10歳以下に各々1例みられた。また性別に関しては、男性14例、女性21例と男性対女性の比は約2:3の割合であった。

偶発症発生から当科来院までの期間は、翌日入院が9例と最も多く、ついで当日、3日以内が各々4例、5日、7日以内が各々3例、10日以内2例の順であり、10日以上放置したものが6例で、最長のものは来院まで数年を経過していた。また4例は不明であった。

偶発症の内容は、上顎洞内歯根迷入が最も多く14例で、ついで上顎洞穿孔が4例、抜歯中断、下顎智歯口底部迷入、異物誤飲が各々3例、根管内リーマー破折が2例、上顎洞内異物、前胸部皮下気腫、エレベーター破折片骨内迷入、顔面皮下出血、嚢胞内歯根迷入、翼突下顎隙膿瘍が各々1例みられた。

8. 脱灰骨移植による骨形成について

斎藤利夫、安藤良晴、高木幸人、大山 治
松田耕策、手島貞一(口腔外科2)

近年 Urist らにより塩酸脱灰骨の骨形成促進能が注目され、その基礎的および臨床的研究が進められている。今回われわれは同種脱灰骨をラット背筋内へ筋肉内移植したものと、ラット頭頂骨膜下移植したものについて移植の場の違いによる脱灰骨の運命の相違について比較検討したので報告する。

使用した動物は、雄のウィスター系ラット(体重約250g、約10週齢)であった。脱灰骨の作製法は、同種